寛永諸家譜

清和源氏甲九冊之内
義家流之内新田流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (9)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

杉平

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義家流四

杉平

長親慶流

長親

信忠

浅草文庫

親盛

三郎次郎　右京亮　福鎌と号す

親次

三郎二郎　右京亮

清康君に志たてまつり戦場ふかもしく

所法類なきさ働のゆえにより銘三郎次郎

と号す

享禄三年　清康君三河守利長

城をせめ給へ無谷殿と合戦す城内ふ

おめく親次一人の大将たちの所指物

してていくしたる一足も志たりぐく

あるべきすきすから一度は指詰とも

ひのまこごこまけく敵陣へみだれ入

郎次十餘人とともにうち死す時分

二十八歳

親俊

三郎次郎　右馬助

康親

右京亮　筑後守

東照大権現ゝ御代ゝ以ゝ

慶長元年大御番ゝ以ゝ

同十年八月ゝ日十二歳ゝ

従五位下に叙せ御諱の康の字

を給ふ

元和二年二月廿三日病死　五十一歳

法名良心

康盛

右京亮　筑後守　後ゝ筑後守ゝ

ゝ

元和二年四月朔日十七歳ゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

五位下に叙す

康俊

宇右衛門

寛永七年七月十日

将軍家に奉て御小姓組の内

番に勤む

康俊

三千石

寛永十八年六月朔日

将軍家に奉る

筑後守康盛　家紋梅花

国立公文書館
National Archives of Japan

信宮

5一　内膳正或いく親盛が兄なり
桜井と号す
享禄二年五月廿日　清康君牧野
伝次伝蔵彩次彩と三河御池て
合戦のとき信宮たなびき子清元
清康君命をうけく士卒の清冷を
はらはらて戦功の戦屋して志ゲく
引きうゲさ牛の刻より又さんて死

悦ましく　清康君げん服をのつ
さげ信定清定兄弟とともに北もひたまひ
先ものをひしく大勝利をおさめ敵
の大将佐佐義新次新義まくをな
らべて討死すまつかつを日河をもつ
て古田の城に入たまふ
同年尾刑科野におのく尾刑勢
と合戦のとき　清康君仰命とう弟て
信定清定兄刑勢と

をひちすさ山軍功ゆへ科野を給りまか
清康君戦場のうこたまつ信定兄
をとうけうまつりて功をなすしるす
なり　清康君市逝去の後一族法家
人逝く信定まつ家督のご
とくをは兄親の名まち　廣忠卿を
勢引ちむしく岡崎の城に入なり
天文七年十一月廿七日卒寸　法名道見

義春

東條甚太郎

利長

浅井長四郎　法名表春樹祥

天文九年　廣忠卿　出一族源次郎信

康なりしひ利長等に命じて安祥の

加勢としてかこのおもむき城中に

たてごもりしむ

六月六日夜引の大軍きたりこまを

しめ城を安祥たる助長なりしひ利長

等城戸をひいくしたりしに信

康甚六郎康忠長家うれ和泉守代

京林長助門長吉清を長る数十

人討死す夜引勢も又おりくうち波

多八右衛門等矢とりて敵をもて

利長士卒をとげまして城とま

ちゆへ夜引勢うれうなへとまりぞて

城外ニ陣すとゝのへ引さら

清宗

与一 内脇正
享禄二年牧野と合戦のきゝ文と
同じく 清康ゟ之ひ戦功ゟ
天文十二年十月ゟ之年寸法通表

家次

監物
永禄元年
大指現家次ゟ命して屏風屏
ゟ屏風の兵附城とさゝいくこまとせむ
家次兵うゝとして廣瀬流竹村孫七郎
成田金平戸波平右衛門流山伝之丞と討
とゝのゑ雑兵数とゝらずこまゝゝ
屏風の敵兵ゝとして敗北ゝゝ

く科野の城とたり今川義元氏真
ろの功と称して感状とたぶく
同六年と川氏真こ引岩略寺ろお
ゆく出城とろまへ侍大将七頭とたへて
かくれとまもりむ
大指現御出るろて家次と先ゑとして
こまとせめくまふ家次命とうけて他
兵法まじへすの勢とりて即河ふ
ろ城と京とろ後河勢数軍とろ

とろ
同年七月廿九日卒去　法名道親

忠正

与一
永禄十二年と川氏真後府と没落
して勢法後中守ご居城を引無川
の城ったてごろとろ出と天王山ふ
ろまふ

大指現市馬を出さきれをせめ給ふ
とき忠正手勢を引ゆく先陣よ
まゝみ貫戸と屋ゝ旗馬ゝと
屏源ゝ法市やゝ屋ゝ屏のうち
ゝせあいる時ゝ
ゝゝひとゝゝ伯ゝゝて忠正手勢出
て陣をゝまろむ
大指現忠正ゝ今日の軍功抜ゝ後
英なりゝて市法ゝ八と給ふこ
れを感ぜゝ
元亀元年六月織田信長浅井勢
と江引姉川おゆく合戦の時
大指現市勢ゝて市ゝと出され勢
合ゝ勢ゝゝゝゝ忠正戦場おゆて
いゝみたゝゝ彩背ゝたゝ勢
勢ゝゝゝゝゝ
天正元年正月十ゝ夏沼彩公江引
野田城ゝたゝゝゝゝ甲引ゝ

兵をせむ忠正
大檀現の命をうけなまり城中の加勢を
おもむきく兵をまとめり
同二年五月
大檀現信長と同じく士卒をひきゐ武
田勝頼と二引長篠ふく合戦のとき
忠正士卒をひきて武田方を
うちとり信長忠正が軍功を感ぜり
同五年七月廿日卒去、享年四十

忠吉

清名道春

与沢郎
忠正死後忠吉家督をつぐ
天正九年二月高列高木の城を
せめまもりて忠吉ひきもり
大檀現の城没落の後田中城攻落
ましまして生涯をつくす忠吉ものもむ

大指現の行ふて数の曲輪一所とせめ
とる亀の甲曲輪と名付く
大指現之と感じたまひ三引の東條
と桜井の海地四百石海加増して
忠吉為代すうちまち又長引科堅
まて二千石の地と給ふ
同十年六月廿四日卒去二十四歳
法名道薫

家廣

同慶正
忠吉卒去の後家督とせく
天正十年
大指現甲引渉入国の時軍役と勤し
同十二年長引小牧陣のとき森長
義相黒とつの酒井左衛尉二引勢
三千給ふとりかくれとも家廣

ゟ長森庄兵衛ゟ士卒井戸弥兵衛下
の数あまたとうちとる
大指現の侍ゟ
同年武州松山城をたまる二万
石と領す
同十九日奥州伊
大指現御出るのとき家康公
七月ゟ十月ゟ江戸中新田の
城の書と勤し
ゟ七月ゟ六月十四日卒去二十歳
法名道曜

信吉

伊豆守
信一ゟ参ゟ子として荻井の家をつぐ
母ハ
大指現の御妹なり

家康ハ信吉ゟ異父同母の兄たち

忠頼

右ゟ先ハ従立住下　母ハ信吉ゟ同
家康病ニ付ル而ハ忠頼家督と仕ル
慶長五年七月関ヶ原陣のとき
大権現御味方仕ル
同年九月清洲ゟ関原江御陣ゟ
大権現江戸ゟ御帰陣のとき忠頼

伺ニ付ル三ヶ所思召ニ
大権現の命ニ付ル而ハ思召の城と
まりゟ関ヶ原ゟ思召の城と
の間ニ数と勤めゟ金山城立
数ヶ年領知仕ル一万石の御金山ニ
一万五千石と領す
同六年二月ゟ駿府の城と給ハ
五万石の地ニ城米五万石と
仕ル

同八年
大檜現市上洛の上京濱松の城に洛
市あり之を京光の市脇坂と云
領す
同十年
石清院殿市上洛の時濱松の城に入市
す
同十二年後府城の普請を勤む
同十四年九月朔日辛未二十八歳

清谷浄春

忠重

大膳大夫　従五位下
母八織田右京亮の女
慶長十五年武州深谷の城を給ら
八千石を領す
大坂夏陣の時浅井備前の守と沼戸竹橋橋
田口の市に戦ふ

元和四年 紀州城の普請を勤し
同五年 江戸城のとき江戸の丸の
浅野寺普請を勤し
同七年 小の丸の浅野普請を勤し
同八年十月 駿府城を作る
一万五千石を領す
同九年 浅野のとき作貫の居城ふ
て立書す
寛永三年 江戸のとき房州百首

清水の書を勤し
同四年八月 大坂
城を立書す
同六年 西の丸石垣の浅野普請を勤し
同年 鍛冶橋の浅野普請を作つ
けしつ
同九年十月 駿府三月まく後
府の城を立書
同十年七月 八月ふくらまく

江戸竹橋の法門番と勤む

同年八月

将軍家の鈞命ふかく後列田中の城を

うけたまわり二万五千石を領す　こたび廉元

の市馬とくくさる

同十一年市ヶ谷の御殿　田中乃城

小滝市ヶ谷　ときに国次の古服拵な

らびに銀子二百枚を領す　墨市の

ときに五千石の法加増をくくさる

同十二年八月新列金門の城を給わる

四万石を領す

同十五年八月ふたたび堅牢二月まで

後府浅城の古普請をたまう

同十六年二月十二日辛未三十九歳

法名道春

忠亜

漢詩守　法名春下　安心上国

享保十七年七月十一日家督
相続
元和元年十二月法印に叙す
寛永十六年七月法眼に
頭を位付らる

忠氏
三七郎

寛永十七年三月
将軍家光に謁す

忠成
宮内

忠勝
右七郎
相模守
実弟養子となる

宗長

同情ゝ　法印法下

忠好

左京亮

忠利

織部正

寛永二年七月

右法院殿と称す

同三年四月清水寺の造営を勤む

同年十二月清水切米五百俵を給ふ

同八年十一月千石の采地を給す

同九年六月

将軍家の鈞命によりて清書院番と

勤む

同十年二百石の清加給を賜ふ

女子

母ハ木下右衛門尉定俊ガ娘織田上野介信雄ガ妻

忠政

万助

寛永十六庚子三月廿日ヲ以テ

信州飯山城ヲ給ハリテ四万石ヲ領

地ス

同年七月ヨリ六月ニ至リ

御軍家ヲ看病ス

同年九月ヨリ十月ニ至リ沼津城

主水野忠善ヲ勤ム

同十七年四月日光 沼津城主水野忠善ヲ勤ム

大橋市ノ番ヲ勤ム

同年八月ヨリ翌年十一月ニ至テ大

橋ノ浦ノ番ヲ勤ム

同十八年十一月ヨリ翌年四月ニ至ル

て田安の清門書と勧めうましき大橋の
山門書とぞしし

万助忠政　家紋葵別紋九曜

信一

初八幡井勅田ヲ
浅田信下　伊豆ヲ浅田信下
永禄三年三月荊尾八町小おめく尾
引同ヘの名と合義のき味ヲ味ヲ
敗北せんとせしき信一ヲ勢とみく
敵とそひまうぐけ味ヲ勝利とれう
同田ヲ後引糟屋名治三月名治の城
小まくごりう名治

東照大権現信一を命じて中山の城をもらしめておくへとも寺沢か兵出張して
度こ和平をかふ信一重恵のさうへをもって移
昔とはさる守りけるち
大権現清むるのきき信一法人を先ち
て城中ふせめしの敵のまこうちとらて
はのふ城をおとす
石ケ瀬二度の合戦し信一をとくぶ
てたうひと吏寸

同年三月ふく一向宗蜂起のとき野寺
れおさへとして和しふとろふ中るの敵
つくしてたうひと吏すと以ふ信宗
の門徒方こちら一揆とおもしてひさた
ふ以へ信一ともしうひく敵とまこうぶけ
猫刑とわちうのふ古井清ふく
大権現の法おふおめくとみやふ敵と迫
敵鉄炮ふく信一ぶ右の股とうつこわ
立とろうたまこ寺敵をとんくふ

よりて清玄寺信一おさへてたゝみ
もせく鉄炮をとりつゝまと面目するとき
こさくろの敵引きわゞく
大檀現信一が勇力にてよく面目せらる
と感じまふ
同十年信長義昭と二度せり立てんぐと
めの引征伐のときかゝ勢と
大檀現まちかちら信一ふ為ゞて引おお
もしむ信一いまゞ信長ら清ゞらう

信長信久百騎ゝ厨信長を使として一方の
先陣ゝ為さのゝ見みわ
信一話ねふ先ゞらて箕作の城を攻め
ふとうちやゞる話ねも忘ゞすん
てせあゝ二九ゝ為ゞるとき死ゞ底ゞ
くものおくゝて士卒ゝみゆず信一
先をかくいうゞをせてみくすみやう
先をうゝ秀吉の名を又城
ふせあゝるゝ信一大言ゝとゞゞくい

ひろハ列ハ年勅四郎信一一番ニ当
城ニせあいをよぶ多を話人さく城
主建部源八郎ハ立うふ城といでのまさ
ゆ善作没落す見ふ佐ゝ木義頼親
書寺山と拵ゝ甲賀ニ入ル望日信一
信長ゝ申みの信長れいくしゝ及ル軍功
誉ニ比ぶ大ニ感じて名ゝ
の桐の紋ハ使用ゝ信長上洛乃
ゝき信一使を義昭と和軍ふ

居たまゝ後信一いゝ海とふ所ニ相首の
鉄炮一挺と拵ゝて三列ニ列ゝ
大權現ふ尚ゝ左ゝ軍中のゝ
長のゝまゝと信
事とのゝ使用義鉄炮をたまゝと言
とゝ記ル
大權現ゝ法感ゝ
同十一年長作田村山城攻ル
氏の但但ふ商ゝて田中の一樓ゝ

一重引城河の城をたてこもるとき
大指現初めて重引ふ入まゝ有士卒ふ
命じて六の城と一所せあゝ賊流
をとゞく誅すべしの 仰まゝ林原小豊
康政先駆けとして屏ふ法さ底とかゝる
信一いくみをんで城ふ入る士卒はいて
せあいら城郭をうらやぶら城中の兵とこ
とゝく誅す
元亀元年六月ある姉川合戦のとき

信長ハ浅井ともしたい
大指現ハ勢多ふ向ふ信長の先ひ
すゝふ敗北を
大指現の先陣いくみをんで信一馬とも
せゝたゝかひを交し甲首二級をうちとる
少ハ味方いくつ川ふ家ゝ軍をする兵
ゆ引しと勢合ハ敗北を
天正三年長篠合戦の時信一士卒とし
けまして戦功いつ

同十二年尾張小牧陣のとき信一
大指現ありて我忠を信ず
同十八年小田原陣に信ず
其忠を
大指現
右遠流殿奥列京勝征伐のあと市左衛
門ときき信一家臣ふおわく
右流殿ふ渡ものなりまつとよ嫁起の
ふ同名れ出あまり市と流ついて

見をたいげ拾ひんとく
大指現佐竹義宣ふ敵勢のまろつのをて
洗雑ふおわくうれ結会をえらべて
信一ふ布川の城をもりめて佐竹おさへ
ふ信一言上しるい永法一代のつのご
我場ふ乃ぐまふふ一度し法を
かくとけこのたび我場ふしるるる
ハ本ことつずとへどし　鈞命ふむさ
ぐてきれあひぐけいのおさへおわくいか

たく見せとまりるべきのよし須賀守
同六年常陸国土浦の城と結ひ渉加増
ありて二万五千石と領す
同年従五位下に叙し伊豆守任す
同七年四月佐竹氏とのゝかくにより常
州江戸崎の城番を勤む
同年七月信吉病ありて土浦城に信一
を同国水戸の城番と勤めらるゝ豆守
ふしうる

信吉

伊豆守　従五位下　安房守
実は松平右近将忠吉が子なり
慶長七年四月常陸府中の城番を
勤め同七月より以て伝弾正庫に成
て又父信一よりかゝりて十二月水戸
同九年従四位下に叙す
寛永元年七月十七日卒去法名道雄

浦の城番と勤しむ

大指現信長ゟ不破の城番と勤むるもと
いとゝらたまひ引上ゟ五ヶ所を
下さる

同九年 浅井下に叛し安房守
任ず

同十年

信長院殿御上洛ありて将軍宣下ある
参内のときゝ信長馬ふくゝ左方引

のゝ首とゝる

同十八年 釣命ふるゝ松平甲斐守
ゝゝて伏見の城番と勤し

同十九年大坂乱のとき信長伏見ゝゝて
井伊掃部頭松平源次郎板倉伊賀守後
亀山城ゝとゝ和しかゝてゝの見ゝとゝゝ
大坂の寄るゝとゝて江戸後河ゝ帰寺

大指現

信長院殿御上洛ありて十月信長ゝ命じ

て小出大和守より岩和田の城をもら
しむ十一月奉書をたまりて岩和田
城を小出出羽守ゟ受取 信吉八年聖ふ越く
屋しき 伯とうあたりゟ西聖ふいゟ
このときき京極丹後守同若狭守ゟ重ゟ陣
すこのこゝゟ大坂ゟちゝさゝへ附城をきゟ
いく信吉ゟ九ゟ新庄越前守ゟ二丸を
西ゟ丸く翌年正月ふいゟ
古渡城敵伏見へ城のときき信吉伯ゟい

ゟゟゟゟゟゟ又伏見の城書を動し
元和元年四月城書を一色宮内少輔義信
古渡附ゟ渡して大坂ゟ陣すべきゟ
伯ゟ名れを同世ゟる伏見ゟ仮聖ゟいゟ
て聖陣をゟゟ五月七日大坂合戦のときき信吉
先をゟゟて戦場ゟゟもしゟ法華を
ゟして忠功をゟねさんば義を和泉ゟる庵
こまをゟく
大指現ゟゟゟすゟゟ茶磨ゟゟおく

毎年寺領 御朱印くだされ候
所と云る虎ノ申ねたるゝ御感
をめたまひ候
同年五月大坂より使者をもつて又御
書を勤む
同年八月伏見の城書と成田左馬助をも
つて清正へ
同三年常州土浦の城をつくる野高
清の城をうけとつて一万石代官を毎年
同五年三月清の城と名をつくる毋沒毋山の城
をうつる紀伊のさくに
同六年八月朔日卒寿 法名京沢

忠國

山城守 従五位下
寛永十二年初めて
大膳亮
左近衛殿と毎年

同十四年十二月廿五日

石清水殿の御内に元服し侍の忠礼
子と名乗り侍判なしに白水の法眼和
と申候し山城守と号す

同十九年正月従五位下に叙す

元和元年五月十五日大坂合戦のとき父と
ひとしく先陣にて軍功をとげ
甲首一級をとりて
石清水殿の御供にうるはしくれたるなり

感ず

同七年六月十日東福院御入内の時
供奉引し侍馬にて奉行列の上首と
なる

同年父法名と法と名乗す

同八年二月廿六日馬之書頭に代く冊
波福地山の城書と勤め八月ふくりて城
書と異動内脇正に成す

同九年八月廿七日

将軍家征夷大将軍ふ任ぜ給ふ参内の時
忠國持ること仕奉り左方行列
之首とたり
寛永三年九月廿二日二條の城へ行幸の時
将軍家清しうして御参内の供奉ふ
列し奉り列の之首とたり

忠晴

伊賀守　従五位下

■寛永十二年初めて
大猷院様を参詣なされ
同十四年十二月廿五日
台徳院殿の法会元服の時清達の忠
代字を給ひ清判なられ行光の法
服拾を頂戴す
同十八年
台徳院殿御命ぜられ清脇書とたり
大坂表度の清陣ふ仕奉りて清の

を侍す

元和元年三月廿七日淀城を伊賀守に任ず

寛永九年四月十七日

将軍家の仰せを受て御書院番の以たる

同年京地の御加番を命ず

同十一月十五日

番を勤む

同十一年

鈞命を受て御参詣

将軍家御上洛の供奉

同十二年十一月十日大御番の頭となる

同十三年十月十日ふたたび

後府城番を勤む

同十六年四月聖体ふまして

二條の御城に在番す

同十九年七月廿五日江戸を發して八月

十二日大坂ふたたび城番を勤む事十九

日にして同月廿九日江戸に

おもむきを九月十二日の後引田中の城を落
りて二万五千石を領す

忠俊

刑部少輔

寛永十三年八月十五日初めて
将軍家に拝謁す

信久

勅四郎

寛永十一年六月朔日初めて
将軍家に拝謁す

山城守忠國家紋は葵にちがへ鳥帽子菊
あるいはかたばみ鳴鏑草と云へり
かへ又桐と用事は信長より信一に給る
皮胴織の紋なり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan